日本英文学会中部支部

第 68 回大会プログラム

研究発表・シンポジウム要旨

日時：2016 年 10 月 15 日（土）

会場：富山大学五福キャンパス
（〒 930-8555　富山市五福 3190 番地）

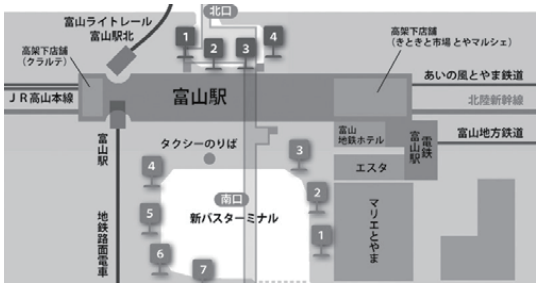
日本英文学会中部支部事務局

〒 422-8529　静岡市駿河区大谷 836
静岡大学教育学部 英語科共同研究室内
E-mail : chubu@elsj.org
HP : http : / / www.elsj.org/ chubu/

五福キャンパスへのアクセス方法

路面電車：JR 富山駅前「富山駅」停留所にて 2 系統（大学前行）に乗車約 15 分→「大学前」停留所下車 徒歩約 5 分

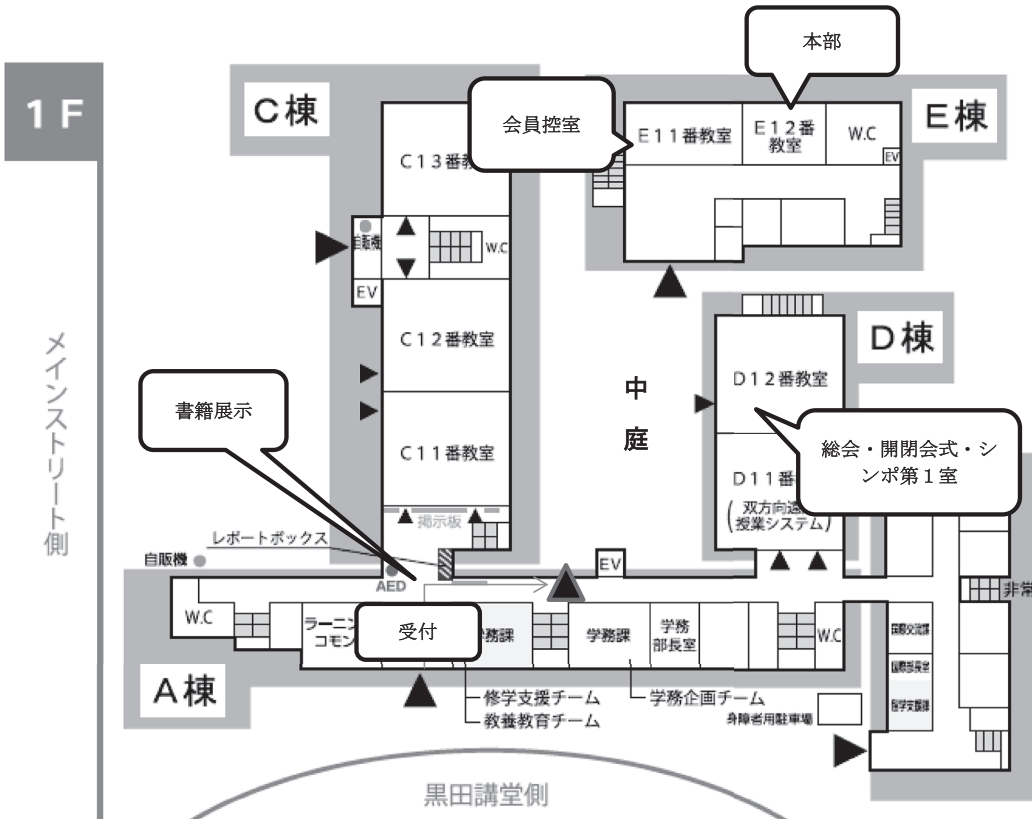
バス：JR 富山駅南口バスターミナル 3 番乗り場にて富山地鉄・路線バス「富山大学前経由」に乗車約 20 分→「富山大学前」バス停下車すぐ

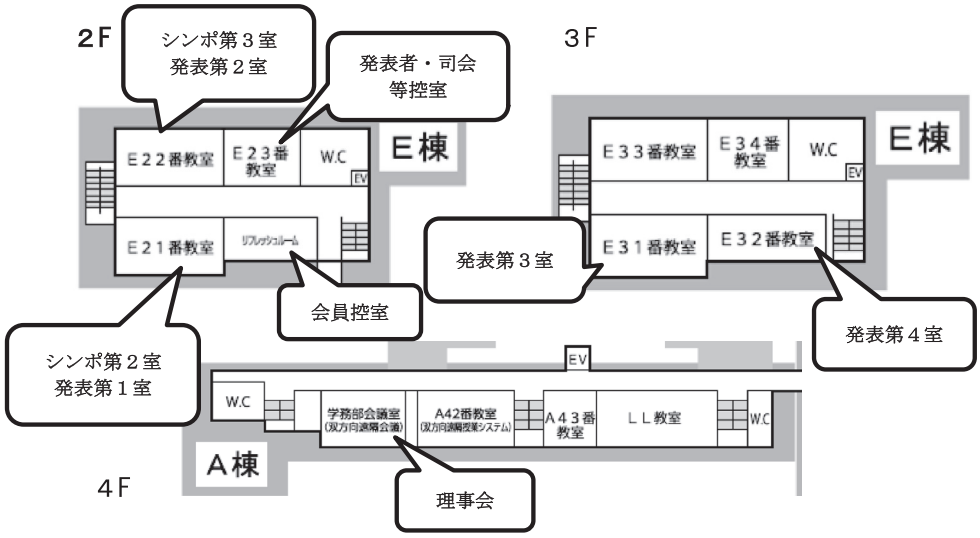


五福キャンパスマップ

A4：共通教育棟 A 棟（受付・書籍展示・会議室）
A7：共通教育棟 D 棟（開会式・閉会式・総会・シンポジウム）
A8：共通教育棟 E 棟（研究発表・シンポジウム・本部・控室）
D4：カフェテリア AZAMI（懇親会会場）

教室案内　共通教育棟（A ZONE: A4～A8）　▲出入り口





受付：A 棟 1 階 黒田講堂側の正面入り口

開会式・総会・閉会式：D12 番教室　　シンポジウム：D12 番教室・E21 番教室・E22 番教室

研究発表：E21 番教室・E22 番教室・E31 番教室・E32 番教室　　講師・発表者・司会者控室：E23 番教室

会員控室：E11 番教室・リフレッシュルーム　　書籍展示場：A 棟 1 階

理事会：A 棟 4 階学務部会議室　　大会本部：E12 番教室

開催校からのお知らせ

【ご入構について】

来客用の駐車場が非常に限られておりますので、自動車でのご来校はご遠慮いただき、公共交通機関をご利用ください。

【食事場所について】

大学内の食堂については、「大学食堂」（C3）が 11 時から 13 時まで営業を予定しております（臨時休業等の場合もあります）。また、周辺の飲食店もご利用いただけます。

【周辺のコンビニ情報など】

学内では学生会館（B7）内の生協コンビニ「Tulip」が 11 時から 13 時 30 分まで営業を予定しております。また、正門前と交差点周辺にもコンビニエンス・ストアがございます。

【開催校からのお願い】

当日は共通教育棟 C 棟（A6）において、TOEIC 試験や公務員講座等の行事が予定されております。ご高配の程、お願い申し上げます。

日本英文学会中部支部第 68 回大会プログラム

日時：2016 年 10 月 15 日（土）
場所：富山大学五福キャンパス（富山市五福 3190 番地）

大会受付　12 : 20 より　（共通教育棟 A 棟 1F）

開会式　12 : 45〜12 : 55　（共通教育棟 D12 番教室）
開会の辞　日本英文学会中部支部長　内田　恵
開催校挨拶　富山大学人文学部長　大工原ちなみ

総会　12 : 55〜13 : 20　（共通教育棟 D12 番教室）

シンポジウム　13 : 30〜15 : 40

第 1 室（イギリス文学）　共通教育棟 D12 番教室
『20 世紀イギリス文学にみる自己と社会』
司会・講師　深谷　公宣（富山大学准教授）
講師　結城　史郎（富山大学准教授）
小田夕香理（富山大学講師）
三村　尚央（千葉工業大学准教授）

第 2 室（比較文学）　共通教育棟 E21 番教室
『THE DEAD WALK！――ゾンビと映画／文学のクロスオーバー』
司会・講師　小原　文衛（金沢大学准教授）
講師　細川　美苗（松山大学准教授）
杉浦　清文（中京大学准教授）
森　有礼（中京大学教授）

第 3 室（英語学）　共通教育棟 E22 番教室
『文法化を問う――構文化をも考慮して――』
司会・講師　中村　芳久（金沢大学教授）
講師　市川　泰弘（金沢大学大学院・日本工業大学准教授）
高島　彬（金沢大学大学院）
コメンテーター　本多　啓（神戸市外国語大学教授）

研究発表　第 1 発表 15 : 50〜16 : 15　第 2 発表 16 : 20〜16 : 45
第 3 発表 16 : 50〜17 : 15　第 4 発表 17 : 20〜17 : 45

第 1 室	共通教育棟 E21 番教室（英文学・比較文学）	15 : 50〜17 : 45
第 2 室	共通教育棟 E22 番教室（米文学）	15 : 50〜16 : 45
第 3 室	共通教育棟 E31 番教室（英語学）	15 : 50〜17 : 45
第 4 室	共通教育棟 E32 番教室（英語学）	15 : 50〜17 : 15

閉会式　17 : 50〜18 : 00　（共通教育棟 D12 番教室）
閉会の辞　日本英文学会中部副支部長　吉田　江依子

懇親会　18 : 30〜20 : 00　カフェテリア　AZAMI（会費 4000 円）

研究発表一覧

第１室（英文学・比較文学）共通教育棟 E21 番教室

司会　内藤　亮一（富山大学教授）

1. 近代初期のイングランドにおけるヘラクレス願望：William Warner の場合
山田　幹郎（名古屋大学名誉教授）

司会　川津　雅江（名古屋経済大学教授）

2.「カサンドラ」におけるナイチンゲールのフェミニスト的ボイス
木村　正子（岐阜県立看護大学講師）

司会　杉野　健太郎（信州大学教授）

3.『ローマの休日』のテクスチュアリティ～ロマン派の文脈において見えてくるもの～
楚輪　松人（金城学院大学教授）

司会　柳沢　秀郎（名城大学准教授）

4. *A Daughter of the Samurai* and the Girlhood in Feudal Japan : A Comparative Analysis
秦野　康子（名古屋大学大学院）

第２室（米文学）共通教育棟 E22 番教室

司会　武田　貴子（名古屋短期大学教授）

1. Benjamin Franklin と知のコミュニティ――フィラデルフィア図書館会社を中心に
竹腰　佳誉子（富山大学准教授）

司会　竹野　冨美子（名古屋学院大学講師）

2. 不安定な物語――*The Narrative of Arthur Gordon Pym of Nantucket* における内と外の権利
高瀬　祐子（静岡大学特任助教）

第３室（英語学）共通教育棟 E31 番教室

司会　中村　太一（福井大学准教授）

1. ラベリング理論による擬似分裂文の統語分析
田中　祐太（名古屋大学大学院）

2. 英語縮約関係節の構造について
鈴木　達也（南山大学教授）

司会　二村　慎一（愛知淑徳大学准教授）

3. 英語衰退動詞の特異性：使役交替現象を踏まえて
高橋　直子（名古屋外国語大学講師）

4. 英語らしさと日本語らしさに関する言語学的予備研究
加藤　鉱三（信州大学教授）
Sean Collin Mehmet（信州大学准教授）

第４室（英語学）　共通教育棟 E32 番教室

司会　柳　朋宏（中部大学准教授）

1. Tyler and Evans（2003）における over の期間用法の考察
石垣　恵一（金沢大学大学院）

2. 所有の表現 have got について
森　敏郎（名古屋大学大学院）

3. On the Historical Development of *come/go doing* Construction
宋　蔚（愛知淑徳大学講師）

シンポジウム・要旨

第１室（イギリス文学）　共通教育棟 D12 番教室

20 世紀イギリス文学にみる自己と社会

司会・講師　富山大学准教授　深　谷　公　宣
講師　富山大学准教授　結　城　史　郎
講師　富山大学講師　小　田　夕香理
講師　千葉工業大学准教授　三　村　尚　央

21 世紀も既に 15 年が経過し、20 世紀を客観的・相対的に評価できる時期に入った。2020 年の大学入学者の多くは 2001 年生まれであり、20 世紀を経験していない学生が大半を占める時代は間近に迫っている。大学教育においても、20 世紀の知的・精神的遺産をいかに対象化し、伝承していくべきかが今後の課題となるだろう。本シンポジウムは、イギリス文学という一学問分野において、そうした課題を構成する視点を大掴みに捉え直そうという試みである。その視点とは、20 世紀イギリス文学にみる「自己」と「社会」である。一般に 20 世紀は、社会が複雑化し、価値観が多様化したことで、自己のアイデンティティを位置づけにくくなった時代である。ヴィクトリア時代の終焉後、二度の大戦、経済不況、サッチャリズムを経験したイギリスや、20 世紀前半までその支配下にあったアイルランドも例外ではない。しかしどちらの国でも、文学作品は時代の傾向に敏感に反応し、不安定な社会やそれに伴う自己の精神的苦悩に解答を与えようとしてきた。本シンポジウムでは、アイルランドを含めた 20 世紀「イギリス文学」の作家達が「自己」と「社会」の問題にどのように答えようとしたかを振り返ってみることにする。壇上のみならずフロアとのやりとりも含めて、この問題を総合的に捉え直すことができればと考えている。

ジェイムズ・ジョイスにおける芸術家の相克――国家と物語のはざまで

結　城　史　郎

1900 年前後のアイルランドは、イギリス支配下の植民地で、政治的に空白期にあった。そのため文学者たちも自治権獲得運動に奉仕するよう期待されていた。アイルランド文芸復興運動はそのような状況を背景にして開花したのである。ジョイスもそうした運動とは一線を画しながら、アイルランド人のアイデンティティの構想を使命としていた。こうして彼は自己成形に寄与した国家の物語を洞察し、先輩作家たちの動向にも目を向け、国家に向けた新たな文学の創作を試みていたと思われる。『若い芸術家の肖像』（1916）や『ユリシーズ』（1922）の主人公スティーヴン・ディーダラスには、そうしたジョイスの苦悩が色濃く投影されている。2016 年はアイルランド独立の契機とされた、復活祭蜂起（1916）の百周年と言われている。本シンポジウムにおいては、現代的な視点からこの蜂起の成否を見据え、国家をめぐる芸術家の役割について検討したい。

固有名としての Murphy と精神科病院のリアリティ

深　谷　公　宣

Samuel Beckett 初期の長編小説 *Murphy*（1938）はふたつの点において、それ以前の作品と異なる展開を示している。ひとつは、主人公の名前である。それまでの作品では、主人公に Belacqua という Dante の *Divina Commedia* に登場する人物名が与えられていたが、本作においては Murphy という一般的な固有名を持った人物が登場している。いまひとつの展開は、精神科病院が作品の舞台として取り上げられていることである。そこには、執筆時に Beckett が精神分析医 Wilfred Bion のもとへ通っていたことの影響が垣間見える。以上を踏まえ本報告では、作品における固有名の意義と、社会制度としての精神科病院の描写の特徴について検討してみたい。とりわけ追究したいのは、精神科病院とそこに出入りする人間の精神・身体の「リアリティ」である。初期の Beckett はしばしばリアリティの重要性について言及している。彼が近代的な社会制度の所産である精神科病院のどこにリアリティを見たのか考えたい。

時代から隔たるヒロインたち
——Margaret Drabble の *The Millstone* と *The Waterfall* を中心に

小　田　夕香理

Margaret Drabble の 1960 年代の小説には、高学歴で知的なヒロインが多く登場する。しかしながら、Drabble が描くのは、彼女たちが社会で華やかに活躍する姿であるというよりも、むしろ、旧態依然とした価値観に縛られて進むべき道を定められない、彼女たちの苦悩である。例えば、*The Millstone*（1965）では、学者の卵 Rosamund が、未婚の母になる過程を通して自らを苦しめてきた伝統的な価値観を手放そうとし、*The Waterfall*（1969）においては、詩人の Jane が、Charlotte Brontë や George Eliot らによるヴィクトリア朝の作品のヒロインたちに自己を重ね合わせることによって、人生や創作の指針を探り出そうとする。本発表では、これら二つの作品を中心に Drabble の 1960 年代の小説を取り上げ、時代との隔たりを経験するヒロインたちを手がかりに、女性をめぐる社会状況の変化と、女性たちが内面化させてきた古い価値観との相克について考え直したい。

写真的記憶の深い表層——20 世紀イギリス作家の記憶観の変遷をさぐる

三　村　尚　央

Kazuo Ishiguro の問題作と言われる *The Unconsoled*（1995）において、著名なピアニストである主人公のライダーは町の新聞記者に言われるがままにポーズを取って撮影された新聞用の写真が自分の思いもよらない姿を写し出していたことに面食らう。被写体自身の意識を超える無意識的なものを映し出すメディアとして写真は 20 世紀初頭から注目されてきた。そして写真を現像するための（21 世紀以降はすたれてしまった）ネガと暗室を用いた魔術的過程は、フロイトやプルーストをはじめとする多くの著述家を魅了して 20 世紀ヨーロッパ圏における意識と無意識を含む精神構造モデルを発展させる源泉の一つとなった。本報告では無意識の迷宮を言語化したと言われる Ishiguro の *The Unconsoled* を取り上げ、しばしば『夢』のロジックから論じられる本作の構造を写真という補助線も利用して検証する。また本報告では、やはり写真が重要な役割を果たすドイツ系イギリス作家 W. G. Sebald の *Austerlitz*（2001）を取り上げたい。本作では主人公アウステルリッツが一枚の写真を手がかりとして自らの思いもよらなかったルーツを発見する。このようなイギリス文学の『外縁』に位置する作家たちを通じて、イギリス文学が次第に外へと開かれていった 20 世紀の動向の一端をフロアの皆さんと考えてゆくことができればと思う。

第２室（比較文学）　共通教育棟 E21 番教室

THE　DEAD　WALK！――ゾンビと映画／文学のクロスオーバー

司会・講師　金沢大学准教授　小　原　文　衛
講師　松山大学准教授　細　川　美　苗
講師　中京大学准教授　杉　浦　清　文
講師　中京大学教授　森　　有　礼

死者が歩く！その行進は、空間的にはグローバルな領域を蹂躙し、文化的にはメディアの境界を侵犯し、ゾンビ＝死者の蔓延は終息を知らない。2002 年頃に始まったとされるゾンビ・ルネッサンスの時代とは、我々にとっていかなる〈現代〉なのであろうか。この問いは、もちろん、結果的には、〈現代〉を生きる我々とは何者なのか、という問いにつながり、ゾンビを〈知る〉ことが、我々の自己の理解＝我々を〈知る〉ことにとって、極めて重大な意味を持つことは確実であろう。もちろん、ゾンビは、学術研究の領域にも多くの〈感染者〉を生み出しており、政治学的・系譜・分類学的映画研究を中心とした、ゾンビについての〈まじめな〉研究もさまざまに発表されてきた。そこで、我々も〈まじめに〉文学とゾンビを並べてみる。ゾンビと文学。一見何とも相性が悪そうに見えるこのカップル。それもそのはず、ゾンビは、少なくとも表面的には（〈モダン・ゾンビ〉という典型的なサブジャンルの発生という局面では）、ドラキュラやフランケンシュタインの怪物とは違って、〈文学〉を介せずして誕生した怪物＝表象装置なのである。ゾンビの〈深層〉を読む仕事はまだ残されている。本シンポジウムは、ゾンビと文学のクロスオーバー／インターフェイスについての〈まじめな〉考察であり、この不似合いなカップルを結び付けている（と想定される）〈赤い糸〉を多角的に可視化しようという試みである。

不死と感染性

細　川　美　苗

イギリスにおける吸血鬼譚として最も良く知られているのはブラム・ストーカーの『ドラキュラ』（1897）だが、それ以前にも吸血鬼にまつわる小説はいくつか書かれている。おそらく、廃頽した貴族階級の男性である吸血鬼表象のイギリスにおける先駆は、ジョン・ウィリアム・ポリドリ（1975-1821）の『ヴァンパイア』（1819）であるが、そこで感染性は影を潜めている。しかしながら、感染性が喚起する恐怖に当時のイギリス人が無関心であったわけではない。『ヴァンパイア』が動きまわる死体の先駆けともいえる『フランケンシュタイン』（1818）と同時に着想されたことはよく知られており、その作者メアリ・シェリーは後に『最後のひとり』（1826）で疫病が人類を駆逐する物語を描いている。キリスト教的な伝統的世界観から進化論に示されるような近代的世界観への移行期であるロマン主義時代に書かれたこれらの恐怖の物語は、近代的な恐怖の典型の誕生を示しているのではないだろうか。不死者と感染が喚起する恐怖は、多くのホラー映画の参照枠となっているリチャード・マシスンの『アイ・アム・レジェンド』（1954）においても見られることを確認して、現在地球規模で消費されるゾンビに関する物語が引き起こす感情の先駆けを、ロマン主義時代に見出そうとするのが本発表の目的である。

ゾンビ、反復強迫、文学的想像／創造力――Jean Rhys と Edwidge Danticat の場合――

杉　浦　清　文

現在、「ゾンビ」は、グローバル資本主義のイデオロギーと複雑に絡み合いながら、多彩な場・局面において、そのイメージの増殖を繰り返している。今や「ゾンビ」は地球規模で消費及び複製される対象である。だが、カリブ海地域出身の多くの作家たちの間では、「ゾンビ」は、少なくともその地域の様々な現実と切り離せない「不気味な何か」であり続けてきた。たとえば、ドミニカ島出身の Jean Rhys（1890–1979）は、*Wide Sargasso Sea*（1966）において「ゾンビ」を題材とする際、カリブ海地域における植民地主義のおぞましき実情を浮き彫りにすることを忘れなかった。また、後にハイチ出身の Edwidge Danticat（1969–）は、Rhys のその作品に登場するオービア・ウーマン Christophine に深く関心を示すが、そのときの Danticat の立場が、ヴードゥーに纏わるハイチの戦慄すべき歴史性と全く無関係にあったとは考えにくい。本発表では、Rhys と Danticat にとっての「ゾンビ」と「反復強迫」、さらに、そうした「恐怖」から生起される「文学的想像／創造力」について探究したい。

不死者達の明けない夜――カニバリズムと欲動の普遍性――

森　　有　礼

ゾンビ映画のジャンルにおいて、George A. Romero 監督の *Night of the Living Dead*（1968）をモダン・ゾンビの嚆矢と看做すことは今や常識であるが、しかしそれ以前にも食人鬼とか食屍鬼（ghouls）と呼ばれる怪物が物語や映像表象の中に存在しなかったわけではない。例えば 18 世紀のヨーロッパの民間伝承には既に吸血鬼に関する恐怖が窺える。また日本で同時期に記された上田秋成の『雨月物語』にも、亡者と化した屍姦･屍食者である破戒僧が登場する「青頭巾」が収録されている。これらの例は、所謂モダン・ゾンビのルーツが、むしろ普遍的な死者に対する畏敬と恐怖、そして（性愛的な意味も含めた）愛着にあることを暗示する。こうした議論から出発して、本論はモダン・ゾンビの根本的な矛盾である、増え続けるゾンビ――ゾンビは咬傷によって感染するが、食人を性とするゾンビは人を襲って食べれば食べる程増えてゆく――を、欲動の循環的自己反復の表象として捉えることを試みる。延いては、今日のモダン・ゾンビというジャンルが、同様に自己消費的に拡大再生産されるという現象についても、欧米及び日本の作品群にも広く目を向けて考察したい。

ゾンビ・ローカリズム／グローバリズム――
George A. Romero のリヴィング・デッドと籠城のモチーフ

小　原　文　衛

モダン・ゾンビの誕生を告げた *Night of the Living Dead*（1968）。監督 George A. Romero は、あるインタビューの中で、この映画は一種の「籠城映画」だと論じている。籠城のテーマは、Romero の（とりわけ 1978 年の *Dawn of the Dead*、1985 年の *Day of the Dead* までの）リヴィング・デッド・シリーズのみならず、ゾンビというサブジャンルのいわば普遍的な文法においても、不可欠な物語要素となる。本発表では、ゾンビと不可分の関係にある籠城のテーマが、〈フロンティア神話〉・〈疫病のメタファー〉・〈（精神分析でいう）刺激保護〉といったコンテクストの〈層〉によって多重決定されていることの検証に着手し、ゾンビという隠喩媒体を構成する〈ローカル〉と〈グローバル〉的要素の錯綜体を分解し、我々が〈今〉体験している（物語・シニフィアンとしての）ゾンビ

蔓延の種子の文学研究的な同定を試みる。

第３室（英語学）　共通教育棟 E22 番教室

文法化を問う――構文化をも考慮して――

司会・講師	金沢大学教授	中　村　芳　久
講師	金沢大学大学院・日本工業大学准教授	市　川　泰　弘
講師	金沢大学大学院	高　島　　彬
コメンテーター	神戸市外国語大学教授	本　多　　啓

認知文法における文法化では、主体化・主観化（subjectification）が伴い、概念内容（content）が希薄化・漂白化し、認知プロセス（construal）が残る、ということが言われている。しかし、トピック（参照点）から主語（トラジェクター）への文法化の場合のように、参照点認知からトラジェクター・ランドマーク認知へという具合に、意味の希薄化などはなく、一つの認知プロセスから別の認知プロセスへの転換が見られる場合もあり、文法化には、単純に概念内容の希薄化のみが伴っているわけではない。本シンポジウムでは、「概念内容が希薄化して、認知プロセスが残る」という特性と合致しない、「概念内容が増加する」ような文法化現象確認しながら、文法化の背後にあるより一般的な認知的傾向を探る。再帰中間構文（中村発表）や *get p. p.*構文（市川発表）の自発用法から受身用法（get passive）への文法化では、Haspelmath の漂泊化説とは逆行して、動作主の分だけ概念内容が増加している。また、「男らしい」の「らしい」から「推量」や「伝聞」の「らしい」への展開（髙島発表）にも、一定の意味増加（証拠性の増加）が見られるが、文法化には収まりにくいところがある。構文化という観点も導入して検討していく。

再帰中間構文の受身用法の文法化

中　村　芳　久

「動詞＋再帰代名詞」という形式の再帰中間構文は、その諸用法は放射状に拡張しネットワークを構成するとされるが、その拡張が線状的であることを論じる。とりわけその身嗜み用法から、自発用法までの拡張では、働きかけの部分が、徐々に希薄化して、最後にはゼロになり、状態変化のみが表されることになる。この点は、ネットワーク表示よりも意味地図表示の方が再帰中間構文の実情（振る舞い）をよく映し出す。この意味地図表示からさらに見えてくるのが、自発用法（状態変化）から受身用法への文法化である。この文法化では、通常言われていることとは違って、意味の希薄化ではなく、（受身用法で加わる動作主の分だけ）意味の増加が見られる。これが示唆するところは、意味の希薄化・漂白化を伴うとされる文法化とは異なる、別種の文法化を想定する必要があるということである。

Get Passive の成立と意味拡張

市　川　泰　弘

英語における *get p. p.*構文はさまざまな用法をもっている。

a. John got arrested yesterday.

b. Mary got married.

本発表ではこのような構文・用法がどのように成立したのかを「get＋oneself＋過去分詞」の再帰構文と再帰中間構文の認知構造から考察を加える。また、単一の構文ではなく、細かな意味の拡張をしている構文の集合体ととらえ、それらの認知構造が「意味の漂白化」あるいは「意味の増加」に基づいて拡張していることを示す。さらに提案される拡張と実際の資料（通時的観点、言語習得の観点）の事実を比較検討し、実際の資料の中で拡張が成立しているのか、あるいは他の要因が加えられながら拡張が生じているのかを考察する。また be 動詞を用いた受動態と get-passive の生起状況は言語習得の中ではどのようになっているも検討したい。

証拠性（Evidentiality）の文法化について

高　島　　彬

英語の文法体系とは異なる点として、日本語の文法体系には、「げな」や「そうだ」、「らしい」といった「証拠性（Evidentiality）」を表す標識が発達している。これらの証拠性の標識を通時的観点から考察すると、①歴史的に、接尾辞としての用法が先行し、その後、助動詞の用法が発生する、②ある対象の有り様や「様態」を表す接尾辞から、根拠を基にした「推量」を表す助動詞へ、その後、聞き手に対して他者の発言を語り継ぐという「伝聞」の用法が発生するという、二つの共通点があることがわかる。本発表では、このような証拠性の標識の中から、「らしい」の文法化に焦点をあて、証拠性を表す標識の文法化のプロセスについて論じる。その上で、証拠性の文法化には、認知言語学において論じられている「主観化（Subjectification）」と「間主観化（Intersubjectification）」という概念が密接に関係していることを示す。

a.　彼は男らしい。　　「様態」

b.　向こうから来るのはどうやら男らしい。　　「推量」

c.　今度入ってくる新入社員は、男らしいよ。　　「伝聞」

研究発表・要旨

第 1 室（英文学・比較文学）共通教育棟 E21 番教室　司会　富山大学教授　内　藤　亮　一

第 1 発表
近代初期のイングランドにおけるヘラクレス願望：William Warner の場合

名古屋大学名誉教授　山　田　幹　郎

ギリシア・ローマ神話の有名な力と勇気の英雄 Hercules（Herakles の語源は Hera の栄光）が、人・時・所によって様々な刺激を与えてきたことは言うまでもない。*MED* によると、ヘラクレスは英語の初例を Layamon に見る（*c* 1200. Cf. *OED* [*c* 1369 CHAUCER]）。しかし、彼は、キリスト教の神を観照する人を理想とする中世にあっては言及されるだけで、ルネサンスになって活動的な人間の理想の一人として再登場する。

ロンドン生まれの法律家ウォーナー（*c*1558–1609）の処女作で散文の物語『パンの葦笛』（*Pan, His Shrinx,* 1584）にはヘラクレスは名前すら出てこない。それが次作の 7 歩格で対句が大半のノルマン人の征服までを扱う史話『アルビオンのイングランド』（*Albions England,* 1586）で活躍する。同作は 4 編と第 2 編の付録の散文アイネアス正史要約とからなり、その後エリザベス 1 世まで数回改訂・増補された。ここでは、16 世紀のイングランドにおけるヘラクレスの受容を背景にしてウォーナーの第 1 版におけるヘラクレス願望の表れ様とその意味を検討吟味する。

司会　名古屋経済大学教授　川　津　雅　江

第 2 発表
「カサンドラ」におけるナイチンゲールのフェミニスト的ボイス

岐阜県立看護大学講師　木　村　正　子

本発表は、フロレンス・ナイチンゲールの自伝的エッセイ「カサンドラ」（1852）における彼女のボイスを読み解き、フェミニスト的であるがフェミニストではない彼女の主張を検証する。従来のナイチンゲール研究は、クリミア戦争時の看護活動の功績から、活動家としての彼女の足跡を追うものが多い。一方で、彼女には多くの著述があるにもかかわらず、一部のフェミニズム批評家以外はあまり彼女の主張に関心を示さず、ナイチンゲールの著述を単独で扱った議論は非常に少ない。その点からも、彼女の作品を読み直し、偉人としてのナイチンゲール像ではなく、悩めるヴィクトリア朝女性のボイスをとらえることは意義あることと思われる。特に本発表では、ナイチンゲールと交流のあった他の女性作家たちの見解を判断材料に用いながら、フェミニストたちとの連帯を拒否し、むしろ男性たちと連携した彼女の姿勢について論じる。

司会　信州大学教授　杉　野　健太郎

第３発表

『ローマの休日』のテクスチュアリティ
～ロマン派の文脈において見えてくるもの～

金城学院大学教授　楚　輪　松　人

オードリー・ヘップバーンの『ローマの休日』は、21 世紀の研究書（*Dalton Trumbo,* 2007）によれば「現代のお伽噺」である。その脚本を読めば、1953 年製作のこのアメリカ映画が、喜劇・諷刺・冒険譚・青春小説など各種の異質なジャンル、諸ジャンル混淆のアマルガム映画であり、さまざまの引用からなる織物であることが判明する。精読すれば、それはロマン派のテクストからなる引用の織物であることも判明する。E. ブロンテの ‘Remembrance’（1845）、P. B. シェリーの *Arethusa*（1820）、バイロン卿の *Childe Harold*（1818）と *Don Juan*（1819）を木霊するテキストである。映画はただ甘く美しいだけのロマンスではない。二つのテクスチュアリティ――コンテクスチュアリズムとインターテクスチュアリティ――を通して浮かび上がってくるものは何か。H. ジェイムズ風に言えば、その「絨毯の模様」は何を表象するのか。その実態を考察してみたい。

司会　名城大学准教授　柳　沢　秀　郎

第４発表

A Daughter of the Samurai and Girlhood in Feudal Japan : A Comparative Analysis

名古屋大学大学院　秦　野　康　子

Etsuko Sugimoto（1873-1950）, born to the chief counselor of the Nagaoka Domain in the province of Echigo（currently Niigata）, was brought up in the strict traditions of a Samurai family in feudal Japan, and was then sent to America to meet her future husband. In her autobiographical novel entitled *A Daughter of the Samurai,* published in the United States in 1925, Sugimoto tells the story of her girlhood as a samurai’ s daughter in English, her second language. The subtitle of her book is *How a Daughter of Feudal Japan, Living Hundreds of Years in One Generation, Became a Modern American.* This presentation compares this narrative of girlhood with those found in Mori Ōgai’ s *Shibue Chūsai*（1916）and Kikue Yamakawa’ s *Buke no Josei*（1943）in order to examine how girlhood and womanhood in feudal Japan were depicted in these works from the perspective of comparative literature.

第２室（米文学）共通教育棟 E22 番教室

司会　名古屋短期大学教授　武　田　貴　子

第１発表

Benjamin Franklin と知のコミュニティ
――フィラデルフィア図書館会社を中心に――

富山大学准教授　竹　腰　佳誉子

イギリスの北米植民地において 2 世世代として誕生したベンジャミン・フランクリン（Benjamin Franklin）にとって、植民地における知識の向上あるいは拡大は、植民地の発展には必要不可欠であったと考えられる。フランクリンのこのような思いは、彼が比較的若いころから知識の向上や拡

大に関するパンフレット等を多く出版していることにも表れていると言えるだろう。

とりわけ「有益な知識」(useful knowledge) の普及のためにフランクリンはいくつかの組織を提案し、実際に設立にまで至っているものもある。本発表では、フランクリンが提案、設立した組織の一つである「フィラデルフィア図書館会社」(The Library Company of Philadelphia) の図書選定、活動、会員たちなどに焦点を当て、独立革命期の知識人たちの植民地における学術的関心と植民地における政治的な動きとの関係性について明らかにしたいと思う。

司会　名古屋学院大学講師　竹　野　冨美子

第２発表

不安定な物語
――*The Narrative of Arthur Gordon Pym of Nantucket* における内と外の権利

静岡大学特任助教　高　瀬　祐　子

エドガー・アラン・ポーの *The Narrative of Arthur Gordon Pym of Nantucket* は、不安定な小説である。本作において、あらゆる力関係の構図は揺らぎ、簡単に逆転する。主導権を握っていた者は入れ替わり、主導権を掌握しようとしたものは失敗し、主導権をにぎっているように見えて実は騙されていたりする。

不安定さは作品の中だけでなく、外にも及ぶ。本作の Preface には “A. G. Pym.” とサインがあり、これにより作家ポーは “authorship” を放棄する。ポーは編集者として登場し、本作の執筆に深く関わっていることは示唆しているが、あくまでピムが自身の体験を書いた「体験記」のように仕立てている。

本発表では、本作の内外にまたがる不安定さを作中における登場人物の覇権争いとピムの相続権放棄、そして外側から見たポーの “authorship” から分析する。

第３室（英語学）　共通教育棟 E31 番教室

司会　福井大学准教授　中　村　太　一

第１発表

ラベリング理論による擬似分裂文の統語分析

名古屋大学大学院　田　中　祐　太

現代英語には、叙述的擬似分裂文（*What John is is worthwhile.*）と指定的擬似分裂文（*What John is is proud.*）と呼ばれる二種類の擬似分裂文が存在する。前者は、主語・助動詞倒置、ECM 構文への埋め込み、wh 節を超える抜き出しが可能であるのに対して、後者は不可能である。本発表では、後者の特別な統語特性はラベル付けの要求から Top＋T の複合主要部が併合された結果であると主張する。具体的には、後者の派生では wh 節は PredP 補部に併合される述語であるので、TP 指定部に移動した後、T とファイ素性による素性共有ができず、Top＋T の複合主要部がラベル付けのために併合されなければならないと主張する。そして上記で挙げた両擬似分裂文の統語特性の違いは、この Top 主要部の有無に還元されると説明される。さらに、この分析が擬似分裂文の連結動詞に関する事実からも支持されることを示す。

第２発表
英語縮約関係節の構造について

南山大学教授　鈴　木　達　也

本研究は、ミニマリスト・プログラム（Chomsky 1995 他）に基づき、(1) のような英語の Reduced Relative Clause（RRC）の構造を明らかにするものである。

（1）We must find the enemy ship cloaking itself with the device.

RRC は実際には縮約関係節ではなく、CP を欠く節構造であるため演算子が関わっていない。Chomsky（2004）の対併合による付加詞の分析を仮定し、RRC が対併合によって生成され、その意味解釈は演算子ではなく PRO に依存していることを示し、RRC では（A）先行詞が常に RRC の「主語」であること、(B)（2）のような前置詞随伴や前置詞残留が見られないことを説明する。

（2）*The enemy tries to mass-produce the device [with which [PRO cloaking their ship]].

司会　愛知淑徳大学准教授　二　村　慎　一

第３発表
英語衰退動詞の特異性：使役交替現象を踏まえて

名古屋外国語大学講師　高　橋　直　子

谷脇（2000）は、yellow、fade、corrode といった状態変化を表す動詞は、外的使役を伴った他動詞として用いることができるが、使役主は原因を表す自然界の出来事に限られ、意図的な動作主は主語にはなれないと論じている。一方、林（2014）はこの谷脇の分析に疑問を持ち、独自のデータを作成し検証した。その結果、林は「衰退動詞を含む文の使役主は原因を表す自然界の出来事に限られることはなく、意図的な動作主も主語になることができる」と指摘した。さらに林は、自動詞文の容認度の違いから衰退動詞を 2 つに分類したが、これに対する統語的または語彙的な根拠は示していない。

本発表では、谷脇と林の分析を再検証し、使役交替を示す英語の衰退動詞の特異性を考察する。さらに、都築（2010）の語彙的使役動詞に関する分類に基づき、他の使役動詞と同様に衰退動詞が行為型と変化型の二面性を持っていることを示す。

第４発表
英語らしさと日本語らしさに関する言語学的予備研究

信州大学教授　加　藤　鉱　三
信州大学准教授　Sean Collin Mehmet

翻訳した和文には独特の不自然さがあり，特に原文に忠実な訳であるほどその傾向は強まる。このことは，英語には独特の英語らしさがあり，日本語には独特の日本語らしさがあり，翻訳によってそれらが崩れるからであると考えられる。本発表では，読売新聞の日本語社説に現れる助詞デとその英訳を比較することで，英語らしさ，日本語らしさとは何であるのかを考える。例えば，日本語では「私は本を三冊読んだ」は全く自然であるのに対し，「私は三冊の本を読んだ」はいささか不自然で翻訳調である。一方，英語では I read books three. とは言えず，I read three books. でなければならない。この現象は，「名詞修飾優先の法則」が英語では on であるのに対し，日本語では off であることから来るものと思われる。本発表では，このような，言語学的に意義深いと思われる日本

語・英語それぞれの「らしさ」を，助詞デに関わるものを材料に検討する。

第４室（英語学）　共通教育棟 E32 番教室

司会　中部大学准教授　柳　　朋　宏

第１発表

Tyler and Evans（2003）における over の期間用法の考察

金沢大学大学院　石　垣　恵　一

Brugman（1981）を皮切りに、これまで英語前置詞 over に関して様々な認知的研究が行われてきたが、その中でも時間的概念を表す over の用法（期間用法）を扱っているものは数少ない。over の中心的意義として、Tyler and Evans（2003）は「トラジェクターはランドマークと接触しうる範囲内にある」という静的な意義を設定しているのに対し、Lakoff（1987）は「トラジェクターがランドマーク上空を横切る」という動的な意義を設定している。

本発表ではまず、over の中心的意義として Lakoff（1987）の意義を部分的に援用し、Tyler and Evans（2003）での意義の改良の必要性を主張する。これは over はトラジェクターが静的な状態でも用いることができるが、その場合動的な経路が背景化されていたり、心的走査によって背景化されている経路をたどることができるからである。次に時間と物の移動には関連付けがあることを示し、期間用法は独立義ではなく物理的移動のある「反対側」義からメタファー的に拡張していることを主張する。

第２発表

所有の表現 have got について

名古屋大学大学院　森　　敏　郎

have got という表現を含む文には通例二つの解釈が存在する。一つは、acquired を意味する解釈、もう一つは possess を意味する解釈であり、本発表は後者に焦点を当てる。所有の have got の起源は完了形であるという説が有力であり、Visser（1973）によれば、have got は 1600 年頃に登場し、1700 年には用法として確立した。起源となる完了形の構造では一般に、have は T の位置を、got は V の位置を占めるとされるが、本発表では、17 世紀において、have が T から V に脱文法化され、また、got が V から *v* へと文法化されたことで所有の have got が出現したと主張する。have, got の（脱）文法化の支持として、歴史コーパス・現代コーパスから得られたデータや、have got の形態的特徴などを含む様々な証拠を挙げる。さらに、所有の have got には、VP 削除が適用される節で do 支持が起こるアメリカ英語方言（*John's got a swimsuit but I don't. (*haven't.)*）が存在するが、そのような方言が本発表の分析によって正しく説明されることを示す。

第３発表

On the Historical Development of *come/go doing* Construction

愛知淑徳大学講師　宋　　蔚

This presentation will provide some diachronic observations on *come/go doing* construction, primarily based on the data from Oxford English Dictionary and the Penn-Helsinki corpora. According to the historical facts, *come/go doing* construction is classified into two categories : the one with *doing* as a present participle（category A）

and the one with *doing* as a noun (category B). Furthermore, I propose a classification of category A into two subcategories. *Doing* in one of the subcategories expresses the purpose of the *come/go* event or describes the order of the events — the *come/go* event is followed by the *doing* event (henceforth subcategory A), while *doing* in the other subcategory expresses the manner of the *come/go* event (henceforth subcategory B). In subcategory A, *come/go* takes SubP that denotes subordinating conjunction as its complement, and the head of SubP takes *doing* as its complement. On the other hand, in subcategory B, *come/go* is analyzed as a light verb merged in *v,* with *doing* as its complement. As for category B, the form *come/go doing* is developed from the form *come/go on/a doing,* and this presentation proposes the structures of them and provides an analysis for the development of category B.

大会関係役員一覧

支部長	内田　恵（静岡大学）
副支部長	吉田依子（名古屋工業大学）
支部選出評議員	内田　恵（静岡大学）
支部代表理事	山本　卓（金沢大学）
事務局長	丸山　修（静岡大学）
事務局長補佐	横越　梓（名古屋工業大学）
書記	小町将之（静岡大学）
監事	鈴木達也（南山大学）

大会準備委員　（◎委員長　○副委員長）

英文学

○宮地信弘（三重大学）
川津雅江（名古屋経済大学）
内藤亮一（富山大学）
深谷公宣（富山大学）

米文学

◎杉野健太郎（信州大学）
武田貴子（名古屋短期大学）
柳沢秀郎（名城大学）

英語学

柳朋宏（中部大学）
二村慎一（愛知淑徳大学）
中村太一（福井大学）

開催校大会準備委員

大工原ちなみ
恒川正巳
結城史郎
深谷公宣
小田夕香理
竹腰佳誉子
内藤亮一